



Title	華僑エスニシティと華僑学校における言語教育との相関性
Author(s)	王, 彩香
Citation	大阪大学言語文化学. 2000, 9, p. 35-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78022
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

華僑エスニシティと華僑学校における言語教育との相関性*

王 彩香**

从19世纪后半起,海外移民的中国人,在当地形成移民社会,并被称为“华侨”。自此,大多数的华侨在当地扎根,一代接一代地将子孙留在当地,永久居留。而华侨的社会也从当初的单纯性逐渐演变,日益复杂。移民初期被称为“华侨”者,是指拥有中国血统,会说华语,了解中国的习俗・生活形态,并持有身为中国人的意识之特性者,亦即持有以上共同“民族性”的。因此,在当时,虽然华侨居住的国家地域各异,但比较上来说却能保持华侨社会的均一性。

一方面,近年来“华侨・华人经济圈”一词,使用频率相当高,此一词指的是,居住在世界各国拥有同一民族性的中国人们,以中国大陆为中心,以华语为媒介所作成的经济网。亦即香港・澳门・台湾的中国人及世界各地的华侨,与大陆的中国人均视为一体,在经济面上强化“中华”的特性。由於这样的影响,在东南亚部分曾经限制使用华语的国家,也将华语视为国际经济用语重新在认识,并开始使用。

因此,本论文表明这些事实的矛盾,把日本华侨的“民族性”,从华语方面调查为目的。结果,从日本华侨“民族性”的多样面之实态中,能抽出典型的日本华侨“民族性”画像,那典型的画像,对比“中国民族性”,而我并称为“华侨民族性”。通过各种分析,能发现出“华侨民族性”是常露出“华侨学校在藉经验者”上。

更进一步调查华侨学校的教育方式,藉此验证华侨学校所即教授的华语,是否制造了某种契机使华侨的“民族性”得以形成。

* “华侨民族性”和华侨学校语言教育之间的相关性(王 彩香)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1. はじめに

中国人移民が日本で「華僑」と呼ばれ始めたのは19世紀後半に入ってからである。その後、19世紀後半から移住し始めた者を一世として、多くの華僑が日本に根を下し、二世・三世と子孫を残している。そして、日本の華僑社会の様相は、形成当初の単一なものから、複雑なものへと大きく様変わりしている。内的要因として、担い手の交代が華僑社会に影響を与えていただけではなく、外的要因としても新たな中国人移民「新華僑」の流入があり(これに伴い、従来から日本にいる中国人を「老華僑」と呼ぶ)、華僑社会をより複雑なものへと変化させていった。その中で、同時に華僑のエスニシティも多様なものへと変化していく結果となった¹⁾。

1998年の夏に行った日本華僑に向けてのアンケート²⁾を分析した結果、日本華僑社会は多様なエスニシティをもつ様々な集団によって形成されているながらも、一般的に、①国籍に拘らず、国際性に富んではいるが、中華民族としての誇りは高く、自信を持っている、②狭間に生きる二面性を持ち、日本と中国との間で物事を柔軟に考えることができ、均衡を保っている、③海外華僑との間に交流がある、という典型的なエスニシティが観察できた。中国でもなく日本でもない、まさしく移民である華僑を象徴するような、この典型的なエスニシティを、私は「華僑エスニシティ」と呼んだ。そして、調査の結果、「華僑エスニシティ」は、華僑学校の教育を通じて形成されているのではないかという予測が立った。

そこで本稿では、華僑学校在籍経験者と在籍未経験者³⁾(つまり一条校在籍経験者)に分類したアンケート分析、聞き取り調査の結果から、在籍経験を持つ者の方が「華僑エスニシティ」を強く持つ傾向があると明確にした上で、華僑学校の教育を具体的に分析していくことで、どのような教育が「華僑エスニシティ」

¹⁾ 詳細は(王彩香、『日本の華僑エスニシティ―言葉のむすび、社会のひらき―』、大阪大学大学院言語文化研究科修士論文、1999)を参照。

²⁾ 回答者は日本に住む510人の華僑である。この中には日本国籍を取得した者も、中国系の血をひく者として華僑と考え、対象に入れている。回答者は、主に神戸中華同文学校の在校生、卒業生とその配偶者、華僑団体の関係者、横浜中華街の中華料理店の経営者とその従業員の他に、大分、埼玉、岡山などの地方都市の華僑である。

アンケートの詳細は、(王彩香、前掲書)を参照。

³⁾ 便宜上、華僑学校在籍経験者を華僑学校「あり」、在籍未経験者を華僑学校「なし」とする。日本には5つの華僑学校があるが、ここでは主に神戸と横浜の華僑学校を調査対象とした。華僑学校「なし」は、一般に日本の地元小・中学校(一条校)に通っていた(もしくは、いる)と考えられる者たちである。

を形成していく契機となったのかを考えていきたいと思う。

2. 華僑学校在籍経験者の意識

2.1 華僑学校在籍経験の「あり」と「なし」による相違

ここではアンケート結果から、華僑学校在籍経験「あり」と「なし」の相違を見ていく。華僑学校はもとと老華僑子弟のための学校であるため、新華僑は総数が少なく、華僑学校「あり」と「なし」の相違として際立って現れるものではなかった。そこで、ここでは、主として老華僑の「あり」と「なし」の様子を見ていく。

2.1.1 言語

華僑学校「あり」は、全員が少なくとも学生時代には華語を話していた経験があるが、華僑学校「なし」では、新華僑は華語が話せるが、老華僑のほとんどは華語が話せないという結果が出ている。そして、華僑にとって、華語は「アイデンティティとしてとても必要なものである」と感じている割合が多い(27%)。華僑学校「なし」は「母の母国語」と答えた者がいるのに対して、「あり」は「自分の言葉」と答えた者がいて、華語に対する意識の違いが見られる。また、「世界の華僑同士を繋げる重要なもの」と海外華僑を意識している者も、華僑学校「あり」に多い(16%)。

2.1.2 帰属意識

華僑学校「あり」と「なし」では、「なし」の方が血統に対するこだわりを感じさせる。アンケートでは、華僑学校「あり」は配偶者が中国系人である者が79%であったが、「なし」の方は85%に上る。結婚についても、全体的には、「人物次第で国籍にこだわらない」が半数以上になるが、両者を比較すると「なし」の方が日本人との結婚に対する反対率が高く(68%)、次世代の子供の結婚対象者についても同じ傾向が現れた。華僑学校「なし」は、華語が話せない中で、中国人であることにこだわり続けていくためには、血統が欠かせない要素であり、そのため、血統を同民族で固めることによって、同化の防波堤を築いているのではないかと思える。しかし、日本国籍を取得している数は、華僑学校「なし」の方がやや多いため(24%)、これらのこだわりが取り払われたら、なし崩し的に同化

は進むのではないかと考えられる。

事実、華僑学校「なし」の方が「あり」に比べて、同一民族間での結婚が多いながらも、国籍面では同化の速度がゆるやかながら増している。華僑学校「なし」の中には、「自分は中国人であることに誇りを持っているが、中国に旅行にいくと、言葉が話せないことで中国人と見てもらえず悔しい思いをする。パスポートに関しても、華語が話せないのに中国籍のパスポートを持っているので、何かと疑われる」という意見の者もいて、気持ちの上では中国人だと思いたい自分と、現実には祖国に受け入れてもらえない自分という葛藤の様子も窺える。そのため、華僑学校「なし」は、自分自身が中華民族の一員であるということにこだわっているながらも、言葉などの面から、現実には中国人として生きることが難しく、できれば日本国籍を取得した華僑という立場で、中国に関わっていきたいと感じているのではないかと思える。また、「帰化したら自分は何人だと思うか」という項目でも、華僑学校「なし」の方が「名実ともに日本人になってしまう」と答える者が多くいて（「あり」が6%に対し、「なし」が19%）、これもまた、言葉が話せない上に、国籍まで変えてしまうと、中国人としての誇りや拠り所を失うと考えるからではないかと思える。

一方、自分の国籍保持となると、華僑学校「あり」の方が比較的こだわっている様子が見られる。半数弱の華僑学校「あり」の者が国籍を失うことには否定的である。しかし、配偶者や周囲の人々の国籍にはあまり気に留めている様子がなく、華僑学校「あり」は、周囲がどうあれ、自分自身が中国人であるという意識にこだわり続けていられたらそれでいいというような様子が見られる。そして、それはまた、「帰化したら他人からどう思われたいか」という質問において、「なし」の方は、「中国系日本人」と思ってもらえれば、日本籍になってしまってもいいと思うのに対して、「あり」の方は、日本籍をとっても、「中国人」として見てほしいと思っている者が多いところからもわかる。

総体的には、華僑学校「あり」の方が、華僑という中途半端な身分を大雑把に捕らえ、肯定的に考えているのに対して、「なし」の方は「あり」以上に、中国的性格を重要視し、中国的性格を受け継いでいくことを、半ば義務のように背負いながら、それでも「自分の考え方・生活スタイルなど日本人と変わらない」と、自分たちを中国人よりも日本人に近い存在だと考えているのではないか。そして、この現象は、様々な中国的な意識や習俗を取り入れることで中国人であろうとしているものの、華語が話せないということが汚|け目となり、中国人になりきれな

いという思いを抱き、自分はやはり日本人に近いのではないかという気持ちになることから生じているのではないかと思える。

2.1.3 交流

華僑学校「あり」は、華僑団体との繋がりが濃く、就職に関しても中国人経営者の元で働く者が多いため、華僑間の交流は、華僑学校「あり」の方がやはり多いが、「なし」も老華僑の場合は21%とかなり存在する。そして、それは「あり」・「なし」双方とも、日本人との交流よりも上回る。華僑学校「あり」は、華僑団体との繋がりも濃く、就職に関しても中国系経営者の元で働く者が多い。

海外華僑との関係においては、「あり」の方が海外華僑と仕事をする者が多く、つながりも断然深いという結果が出ている。華僑学校「なし」は、海外に親戚が住んでいない者の方が若干多く、海外華僑との繋がりはいくらか希薄である。

また、海外華僑の結婚対象者となると、「受け入れられる」と答えた数が華僑学校「あり」の方が「なし」よりも5倍も多くなる。ここから、華僑学校「あり」の方が、同じ華僑だという意識から、比較的海外華僑に対しても開かれているのに対し、華僑学校「なし」の方は、海外華僑は同じ民族だとは感じていながらも、自分とは異質な存在だと考えていると見る事ができる。そして、この差異にもやはり言語が影響しているのではないかと思われる。

2.1.4 習俗

「中国的なことをしているかどうか」という問いに対して、華僑学校「なし」は「あり」よりも積極的に行っている様子が見られる。習俗に関しては、「あり」より「なし」の方がきちんとこなしている者が多く、伝統を守っている様子が見られる。華僑学校「なし」は、食生活においても、中国食を食べている率が高く、習俗で以って、中国人であることを守ろうとしている様子が伺える。

2.2 考察

このように華僑学校「あり」と「なし」では、華語が話せるかどうかによって様々な差異がある。特に、華僑学校「なし」の方は、血統・習俗や伝統を守ること、自分は中国人であるということに強くこだわりを持つが、華僑という枠組での海外華僑との関係は希薄で、マジョリティである日本人との同化の程度は急速である。一方、「あり」の方は、血統に対するこだわりは比較的低く、混血を気

にしないが、自分自身の国籍に対するこだわりは強い。そして、それは、あくまでも中国国籍を残し続けることに意味を感じているのではなく、民族の誇りを持つという行為が中国国籍を保持するという形で表出していることを意味する。というのも、華僑学校「あり」は国籍変更について「したくない」と答えている者が多いにもかかわらず、実際に国籍変更をしている者の数は少ないからである。そして、国籍変更をしている者の多くは、変更した後も、依然として自分は華僑社会の一員だという意識を持っている。つまり、自分が華僑であるという意識を持ち得ることが一番大切なことで、国籍や血統、習俗等はあまり大きな問題でないと感じているのである。

華僑学校「なし」は、外ではマジョリティである日本人と接し、家庭では閉ざされた環境で中国人として教育され、公の華僑集団との接触がほとんどないため、アンケートの中では、華僑としてよりも、中国人として自分のことを位置付ける者が多いと思われる。しかし、華僑学校「あり」は、自分は中国人というよりも華僑であるという意識の方が強い。そのため、海外華僑とは友好的である。今ある自分の姿がすなわち日本の華僑の姿であるということを自覚しているので、アンケートの中では、華僑学校「なし」が懸命に中国人らしさを追求し、中国を背負っているのに対して、「あり」は、何事に対しても、「ゆとり」とも思える比較的柔軟な態度を見て取ることができる。この考え方は、シンガポールの華僑社会にも通ずるものがある⁴⁾。そして、その態度が、日本国籍を取得しようが、日常生活で華語を話さず日本語を話そうが、自分たちは華僑であることに変わらないという誇りを感じられる。このように考えると、華僑学校「あり」は「なし」に比べて、国籍、血統などの表面的なことからは、同化の程度は進んでみえるものの、意識の上では華僑であるという誇りが随所に見られ、意識の上での同化の程度はそれほどではないように思える。

そして、このようにして考えてみると、華僑学校「あり」の方が、「なし」よりも、先に見た典型的な日本華僑像に近いことがわかる。そして、ここから、華僑学校が華僑エスニシティ形成に何らかの役割を果たしていることが認められる。

⁴⁾ 夏茜、「シンガポールメディアの中での日本語からの外国語」、『月刊言語』、1997.9、Vol.26、No.10、PP.98-104

3. 華僑学校の教育

前章では、華僑学校在籍経験の「あり」と「なし」による相違を見てきた。ここで、注目すべきは、華僑エスニシティの中でも、華僑学校「なし」は、意識が中国人としてのものに傾いているのに対し、華僑学校「あり」は華僑としてのものに傾いているという点である。そして、典型的な華僑エスニシティは、華僑学校「あり」の場合に強く形成される傾向にあるという点である。

それゆえ、ここでは、華僑学校での教育を通して、どのように、華僑であるという意識が形成されていくのかを、神戸中華同文学校を例にとって探っていく。

3.1 神戸中華同文学校⁵⁾

神戸中華同文学校は、元来老華僑のための学校で、その性格上、華語・中国文化を柱とした民族教育が行われている⁶⁾。現在約600人の生徒が通っていて、小・中学計9年間の一貫教育が行われている。

教育目標には、「民族教育を通して、華僑子女が祖国に関する正確な知識を習得し、徳育・智育・体育方面にわたって発達を遂げ、中国人としての自覚を身につけ、将来日中友好事業に積極的に貢献できるようにする事」⁷⁾と掲げており、日本華僑として、中国だけでなく、居住国日本との関係も重視している。

3.2 同文学校での華語の扱い

3.2.1 教科の中での華語

同文学校の教育課程では、特に華語に力を入れている。そして、そのカリキュラムの成果は、同文学校に通う中学生のほとんどが、日本中国語能力検定試験の3級に通るほどの実力を持っていることから証明できる。

他の科目においても、同文学校の教育はよい評価を得ている。本来は各種学校扱いであるために、一条校(学校教育法上の学校)の高校に進学することが難し

⁵⁾ 1899年に神戸華僑同文学校、1914年に神戸華強学校、1919年に中華公学と神戸地区には3つの華僑学校が創立したが、1928年に華強・中華両校が合併し、阪神中華公学と改名、1939年、華僑同文学校と阪神中華公学が合併し、現在の校名に改称された。最初は広東語教育が行われていたが、1919年創立の中華公学より北京語による教育が始まる。

⁶⁾ 王彩香、前掲書を参照。

⁷⁾ 神戸中華同文学校、前掲書、P.1

いが、神戸市教育委員会などによって、文部省が定めるカリキュラムにおける同文学校の学力水準が、一条校の中学よりも高いと認められたところから、進学に関しては、一条校と同等な待遇が与えられている。そのため、ほとんどの児童が、地元公立、私立高校へと進学する。

一条校と異なる点は、基本的に日本語⁸⁾(学校では日語と呼んでいる)の授業を除いて、すべての授業が華語で行われ、華語で板書されることである。そして、その上に、民族教育としての華語・中国地理・中国歴史・華語会話を学び、体育・音楽・美術等の芸術科目にも民族色を加えて、太極拳・中国児童歌・中国民族楽器の演奏・切り紙・水墨画・京劇のお面づくりなどを授業で取り上げている。

教科書は主に、神戸市の一条校が使用している教科書と、それらの教科書を華語に翻訳したもの、華僑学校独自で作ったもの、祖国や香港・海外華文学校で使われているものなどを、教科ごとに使い分け用いている。もちろん、教科の中でも、華語・華語会話・中国歴史・中国地理・中国児童歌などの教科書は華語で編纂されている。

つまり、教科によっては、日本語で本を読みながら、華語でノートを取り、授業を聞くということをする。英語においては、英語と華語でノートを取り、華語で授業を聞くということになる。唯一、日本語の時間だけは、日本語で授業を受け、日本語で本を読み、ノートを取り、日本語で会話してもいいことになっている。

華語で書かれているそれらの教科書の中で、中国人であるという意識の形成に寄与していると思われる例を、一部『語文』(日本で言うところの「国語」)の教科書の中から抽出してみた⁹⁾。

○華僑エスニシティ形成の一要因と成りうると考えられる箇所

(小1)

- (1) 我是中国人。(私は中国人です)
- (2) 我爱中华人民共和国。(私は中華人民共和国が好きです)
- (3) 我爱北京天安门。(私は北京の天安門が好きです)

⁸⁾ 学校教育法上の学校の「国語」にあたる。教科書も神戸市の一条校のものを使用している。

⁹⁾ 対象とする教科書は神戸中華同文学校編、小学の『語文』の教科書である。『語文』の教科書の多くは、中国の学校で一般に使われている教科書の本文をいくつか抜粋し、編集したものである。

〈小2〉

(4) 春天来啦！ 春天来啦！ 海南岛上、盛开着鲜花；长江两岸、柳树刚刚发芽；大河上下、还在飞舞雪花。啊！ 这就是中国、辽阔美丽的国家。

(春が来るよ！ 春が来るよ！ 海南島は、ちょうど花盛りです；長江の兩岸は、柳の枝にちょうど芽が出たばかりです；大河の上は、まだ雪が舞い下りてきます。ああ！ これが中国…広く美しい国家)

このように、中国人という視点で、祖国中国を知る教材が多い。また、小学1年の早い段階から、自分は中国人であり、祖国は中国だということを意識させている。そして、それら華語で書かれた教材を通して、中国人としての価値観・美意識・行動様式などの一端を身につける。

また、一方で、日本の歴史・地理・公民などを学び、日本語を学ぶ。そして、これらを一条校の児童と変わりなく身につけていく。しかし、日本語の教材で中国の漢詩・漢文などが扱われた時には、華語の教材と併用して学んでいくし、歴史なども中国と日本の関わりが登場した時には、日本側からだけでなく、中国側からも視点を移して見ていく。そして、道徳の授業では、華僑学校の成り立ちを始め日本華僑の歴史等も学ぶ。時には日本社会の中で成功を治めた華僑を招聘し、講演を催すこともあり、児童に日本華僑として、どのように生きていくべきなのかを教育する。つまり、同文学校に在籍するということは、中国と日本を融合した環境に在るということがいえるのである。

3.2.2 日常語の中の華語

同文学校に通う生徒の国籍は、1985年の国籍法改正を機に、日本国籍を所有する者が若干増えたものの、それでも約60%が中国籍を保有している。しかし、現在の二・三・四世が中心となった老華僑社会では、多くが家庭の中で日本語を母語として使用している。一方、同文学校では、授業時間だけでなく、教師との会話、生徒同士の会話も華語で行うことを奨励している。

そういう理由で、同文学校の生徒の多くは、学校では華語を、通学路では華語と日本語の両方を、家庭では日本語を、外部の日本人には日本語を、場所や人によって使い分けている。そして、それは小学校低学年の頃から行われている。彼らにとってそれはごく自然なことなので、それほど問題がなく、言語スイッチの入れ替えが行われる。そして、ここから生活の中でも、華語と日本語の両方が混

じりあいながら使用されている様子が窺える。

3.2.3 生徒の意識の中での華語と日本語

もちろん、同文学校の生徒は中国人としての意識だけを身につけるのではない。日本語の教材では、各学年一条校と同じものを使用しているので、日本語に裂く時間は少しではあるが、各学年に相当する日本人としての考え方、行動の仕方なども同時に学ぶ。中華同文学校の老華僑の生徒が、どのように華語を彼らの日常語として定着させているかを、唯一日本語を使ってもよいとされている日本語の授業に、日本語で書くように指導しておいた作文から見ていきたいと思う¹⁰⁾。

〈作文の例〉

- (1) お父さんは一つの大きな眼鏡をかけています。
- (2) 父がよく私にいっていました。「立派な人たちは、みんな努力をして立派な人になっているのだよ。努力をしないで立派になることなんてだれもできないんだよ。」と¹¹⁾。

このように、華語を基礎とした文法構造などが、文中にはよく見られる。ここから、ひとまずではあるが、同文学校の生徒は、日常生活の中に、日本語と混在しながらも華語を定着させていると言うことができるであろう。

3.2.4 誤用・借用

日本の老華僑社会では、日本語使用が基盤にあり、その上で、場面に応じて共通語としての華語が話されている。しかし、母語である日本語が、第二言語として習得される華語に影響を及ぼし、様々な借用や誤用が確認できる。以下は、同文学校の生徒の会話より採取した借用・誤用の一例である。

- (1) *三张写了。(書道の字を)三枚書いた。)
- (2) *我听他这里写什么。(私は彼にここに何を書いているのか聞いた。)

¹⁰⁾ 1996年、小6(2クラス)の日本語の授業中に実施。

¹¹⁾ 1、2共に日本語では少しおかしい感じがする。1は日本語では本来必要のないところに、助数詞がついている。2は日本語では倒置法であるが、強調文でない場合、一般にはあまり使われない表現である。しかし、華語ではこのように表記することは一般的なことから、華語の影響が見られると考えられる。

(3) *我拿着定期。(私は定期を持っている。)¹²⁾

同文学校の教師間では、上記のような日本語を取り入れた華語の誤用・借用に厳しい姿勢をとっており、このような華語を華語としては認めていない。そのため、同文学校では、生徒間で誤用・借用を見つけた場合、その都度指摘して直すようにしている。また、中学部では、近年、華語文法を華語会話の時間に取り入れ、誤用・借用についてどのように直すべきなのかを厳しく指導している。教師間でも、月に一度ぐらいの割合で、よく耳にする生徒の誤用・借用の例を挙げて分析し、指導方法を明示したプリントが配られるほどである。

そして、このような華語の誤用・借用に対する厳しい扱いは海外華僑の中でも珍しい。例えば、シンガポールの華僑社会では、共通語としては華語を基盤としているが、語彙・表現の面などにおいては、中国南方方言、台湾語・広東語からの借用語の他に、外来語などの借用が数多く見られる。そして、外来語と一口にいてもその種類は様々で、シンガポール華語への影響は、英語・マレー語・タミール語・日本語等の言語が報告されている¹³⁾。夏茜氏は、これらの言語は華僑社会の中で、流行語として使用されているが、シンガポール華語の一部として位置づけられていると主張する。そして、これらの流行語は、シンガポールの華僑が、メディア等から積極的に取り入れたものだという。そこから、シンガポールの華僑社会では、誤用や借用に対しての寛容さが伺える。

一方、日本の華僑社会は、言語間の誤用や借用は、日本語と華語との間に限られると言える。また、その使用は流行語という意味合いは全くなく、あくまでも母語干渉の域を出ない。

¹²⁾ ①は、本来華語は、動詞が前にくるはずだが、日本語の影響で、ここでは後ろに来ているために誤用である。

②は、日本語の「聞く」には、広義に、「自然に聞こえてくる」というような受動的なものと、「尋ねる」のような能動的なものが含まれているが、華語では、「听」は前者を指し、「问」は後者を指すことから、使い分けなくてはならない。ところが、ここでは日本語で思考したため、誤用として現れた。

③は、華語で「定期」を「月票」というが、ここでは、「定期」という日本語を華語読みにしたために借用が見られる。

¹³⁾ 張楚浩、「広東語対新加坡華語の影響」、『語文研究』、1988、P.39

吳英成、「“羅惹華語”——新加坡華語訊碼轉換分析一」、『語文研究』、1988、P.15

陸陰明、「新加坡華語規範化的問題」、連合早報、1995、P.23

夏茜、前掲書、PP.98-104

3.2.5 同文学校の新華僑

新華僑は華僑学校において華語がすでに堪能である。そして、新華僑が華僑学校に入学する大きな理由は、一条校における言語摩擦の問題であって、初期段階では、彼らには華僑エスニシティ形成のために華僑学校に通うという考えの者は少ない。

教科書は日本語で書かれているものもあるが、授業の多くは華語で行われているため、なんとか授業について行くことは可能である。しかし、日本語の授業には困難が伴う。教科書も媒介語も日本語であるため、理解することができない。そこで、教師は、放課後、新華僑の児童を集めて日本語を指導している。近年、新華僑の増加に伴い、「日本語補習班」という補習学級まで作られ、指導が行われている。また、同文学校では、言語だけでなく、各種芸術科目の中にも、中国の小・中学では学ぶことのない書道やリコーダーの練習などが取り入れてあるため、徐々に日本的な教育にも慣れていく。

ここから、新華僑についても、華僑としてのエスニシティを持たせる努力が行われていることがわかる。そして、実際、華僑学校に入ることによって華僑社会と繋がりをもち、日本語を学ぶことで、老華僑と同じように華僑エスニシティを形成する者も少なくない。

3.3 教師の意識

上のいくつかの項目で華僑学校での教育が華僑エスニシティを形成するために重要な役割を果たすことがわかった。そこで、華僑子弟の教育をする教師が、児童の華僑エスニシティを形成させるために、どのような意識を持って教育を施しているかを知るため、アンケートを実施した¹⁴⁾。

同文学校の教育方針を問う項目に関して、同文学校の教育は「民族性の保持」、「華語の習得」の順で重視しているだろうという意見が最も多く(両方で70%)、実際に教師側もそれらの点に注意して指導している者が多かった。また、保護者としての立場からも「祖国に誇りを持てる人になってほしい」、「国際社会になれば華語が将来欠かせない」、「中国人としての自覚を身につけさせたい」などの意志を持って同文学校へ児童を入学させている様子が窺え、やはり華僑学校では「民族性の保持」と「華語習得の役割」が大きく期待されている。「華語は児童に

¹⁴⁾ 教師23名の回答を得ることができた。

どういった役割を果たすと思えるか」という問いについては、「国際的な感覚が得られる」という意見が最も多く(26%)、「中国人というアイデンティティが養える」(24%)という意見を上回った。後に続く意見も「バイリンガル教育で社会に役立つ子ができる」(21%)、「広い視野を持つ」(16%)など、中国人として必要なもの考えるよりも、華僑として、国際的な感覚を身につけるために必要だという意見が半数を超える結果となった。

4. おわりに

日本に住む老華僑は、生まれた時から日本の社会に生活し、日本の情報メディアや日本人との接触によって日本の行動様式、価値観などを学ぶ。そして、同文学校に入学し、日本語の教科書から様々な一条校の様子を垣間見ながら、華語の教科書を使用し、華語でコミュニケーションをとり、華語から中国の行動様式、考え方、価値観などを学ぶ。そして、生徒は、言葉の上でも生活の上でも日本と中国の両方を融合する形で、自分の生活の中に取り入れ、定着させている。幼少期から、日常的に日本と中国とが融合する環境にあって、華僑エスニシティの特徴である柔軟な二面性を獲得したのではないかと思う。さらに、祖国中国の教材や華僑の成功者の姿を実際に見ることで、華僑としての誇りを持ち、華僑であることを肯定的に捉えるようになるのだと思われる。また、同文学校教員の意識の中にも、華語や民族性の保持を重視し、国際人としての「華僑」を育成しようとしている様子を見ることが出来る。このように、言語を中心に、環境・教育等の様々な要因が華僑学校には備わっていて、華僑学校在籍経験者には、典型的な華僑エスニシティが形成されるのではないかと思われる。

そして、また、一方では、日々日本語と華語との間にゆれながらも、華語をビジン言語として存在させることを良しとしてしまわない日本の華僑社会の一端が発見できたように思える。華僑は日本においてマイノリティな存在のため、日本国内においての変則的な華語の使用はほとんど意味を成さない。日本は日本語のみを公用語としているため、マジョリティである日本人との関係においても、日本華僑間での関係においても、日本語だけで日常生活には事足りる。神戸市内の近隣小学校が次々と閉校になっている状態の中、それでも華僑学校の生徒の数は比較的多い。日常的にはそれほど必要のない華語を学ばせるために、わざわざ遠方から通わせてまでも、華僑が華僑学校に子弟を学びにやらせるのは、ひとえに

中国と海外華僑の存在を意識してのことではないかと思える。そして、そのためにも、日本の華僑学校では、中国や海外華僑間でも正しく通じることを目的として、標準的な華語を教授しているのではないと思われる。

5. 主要参考文献

- 王彩香『日本の華僑エスニシティ—言葉のむすび、社会のひらき—』、大阪大学大学院言語文化研究科修士論文、1999
- 王彩香「中国からの新渡日児童をめぐる現状とその問題点」、在日外国人教育研究協議会編、『これからの在日外国人教育』、1997
- 夏茜「シンガポールメディアの中での日本語からの外国語」、『月刊言語』1997.9、Vol.26、No.10
- 神戸新聞社『素顔の華僑』、人文書院、1987
- 神戸中華同文学校『学校要覧』、1998
- 呉英成「“羅惹華語” —新加坡華語訊碼轉換分析—」、『語文研究』、1988
- 朱永新・王智新主編、朱慧玲著『当代日本華僑教育』、山西教育出版社、1996
- 菅原幸助『日本の華僑』、朝日新聞社、1991
- 張楚浩「広東語对新加坡華語的影響」、『語文研究』、1988